優秀賞（学生部門）

日本人は「進歩主義」の呪縛から脱却できるか？

真の精神的独立を勝ち取るために

三好（みよし） 正雄（まさお） 25歳
京都大学大学院 文学研究科
文献文化学専攻 修士課程2年

一 欧米的「進歩主義」に追従する日本人

今年の五月にアメリカのミネソタ州で黒人男性が白人警官に殺害されたことをきっかけに、抗議運動が広がっています。八月にも、ウィスコンシン州で白人警官による黒人男性への銃撃事件が起き、抗議運動は勢いを増す一方です。

「Black Lives Matter（黒人の命は大切だ）」をスローガンとする一連の運動は、元々は平和的に始まりました。しかし、この手の活動の宿命と言うべきか、他の社会運動の例に漏れず精鋭化し、反警察を明言するとともに、数々の破壊行動や略奪に及んでおります。このような惨状を見かねて、アメリカの心ある人々の間では、「All Lives Matter（全ての命が大切だ）」を合言葉にカウンター行動を広げようと動きがあるものの、「リベラル派」の妨害に遭い、成功しているとは言い難い状況です。「リベラル派」による暴動や略奪行為が無批判に正当化される一方で、それに対する穏健な市民によるカウンターが「差別的」だとして批判されるのはある意味アメリカらしいと言えるかもしれませんが、我々としては実に不思議なことです。

しかし、それ以上に不可解で、また馬鹿馬鹿しいのは、欧米でこのような社会運動が盛り上がれば、必ずといっていいほど我が国内にもこのような「進歩的」な風潮に便乗しようとする勢力が現れることでしょう。アメリカの事件と時を同じくして、職務質問を拒否したクルド人男性を警察官が取り押さえたことをきっかけに、渋谷で警察に対する抗議デモが起こりました。この件については、当の日本クルド友好協会がデモの正当性を疑問視するほどであり、仮に警官の対応に問題があったとしても、原因の多くがクルド人男性の側にあったことは明らかです。

このように、欧米で何か運動が盛り上がると、「リベラル」や「進歩主義」を自認する人々がすぐに追従しようとするのは、実に愚かしいことであり、また嘆かわしいことです。ただ、アメリカとは違い、この運動で決定的な破壊活動を企てる者が現れなかったのは、まだこの国にも救いがあるということでしょうか。

二 「進歩主義」追従の系譜

さて、この件に限らず、日本には欧米の「進歩的」な思想や運動を金科玉条のように奉り、これを信じて疑わない空気が一部にはあります。その根は深く、古くは社会主義や無政府主義運動に始まります。これらの運動はもちろん、ロシア革命に呼応して行われたものです。

戦後、東京裁判で当時の日本の対外政策が徹底的に断罪されるとともに、占領軍の政策により戦前の政治体制や社会、伝統も否定されることになりました。彼らのイデオロギーを明文化したものが、現行の日本国憲法です。

当時の「進歩主義者」たちは、このような風潮にいち早く呼応しました。彼らは、日本国憲法に明文化された民主主義や平和主義といった価値観を絶対視し、これと異なる旧来の日本の伝統的な価値観を激しく攻撃しました。いわゆる、「戦後民主主義」です。

もちろん筆者は、民主主義や平和主義の価値観そのものを否定するつもりはありません。民主主義や平和主義は「戦後民主主義者」や左翼の専売特許のように思われていた時代もありましたが、実際には戦前の日

本も民主主義な価値観を有していたことはよく知られています。大正デモクラシーなどはそのわかりやすい例ですが、もとより日本には和を以て貴しとなす美しい伝統がありました。戦後、日本は民主主義・自由主義陣営に属することによって、世界随一の経済大国にまで発展することに成功しました。民主主義や平和主義といった価値観は、今日の先進国ではある程度常識的なものであり、この価値観が健全な範囲で行われるのであれば、むしろ共産主義や社会主義といった権威主義的な危険思想への強力な防波堤になり得ます。

ですから、日本の「進歩主義者」の民主主義的価値観への迎合も、あくまでも健全な範囲に終わっていれば、そこまで大きな毒にはならなかったのではないかと思うのです。現に、終戦後の初期において、戦前からの穏健なオールド・リベラリストたちは民主主義的な風潮を歓迎していました。しかし現実には、このような好ましい流れは早くも潰えることになります。戦後ほどなくして、「進歩主義者」たちはソ連流の共産主義や社会主義に急接近していくことになったのです。

残念なことに、実は占領軍の関係者や日本国憲法の起草者の中に、ソ連の協力者が多数混ざっていました。「戦後民主主義者」が日本国憲法に強く惹かれたのも、このような共産主義の匂いを随所に嗅ぎ取ったからでしょう。オールド・リベラリストたちはこのように毒されてしまった「戦後民主主義」に早くも見切りをつけ、保守派としてこの社会に警鐘を鳴らしていくことになります。

そもそも、当時の日本人のインテリの中に、共産主義や社会主義に毒された者がかなりいました。戦前はある程度統制が効いていたため、このような過激運動家が大々的に活動することはありませんでした。しかし、終戦に伴い、過激運動家が一斉に野に放たれることになりました。その際、彼らが注目したのが、占領軍によりもたらされた「戦後民主主義的」な風潮でした。彼らは、「戦後民主主義」に便乗することにより、日本の国家や伝統を破壊し、彼らが理想とする共産主義社会を樹立しようと目論みました。

このような流れで行われたのが、共産主義者や労働運動家による一連のストライキやテロ事件です。もちろん、彼らの過激な運動が国民に受け入れられるはずもなく、彼らの行動は徐々に下火になっていきました。しかし、表立った行動が行われることはなくなったものの、彼らの思想はメディアやインテリ層を中心に連綿と受け継がれることになりました。特に、アカデミズムにおいてこのような「進歩主義」が支配的になったのは、実に残念なことでした。歴史学や政治学の分野において、日本の社会や歴史を西洋と比べて「劣った」ものと見なし、克服すべき悪であるとして徹底的に批判するような「研究」が流行したのです。そもそも科学的な学問というものは、何らかの観察対象の事象について、その因果関係や相関関係、背景などを確かな根拠やデータに基づいて明らかにするべきものであり、そこにいかなる価値判断が介在してはならないことは言うまでもないでしょう。しかし、彼ら「進歩主義的」な学者は、「日本が絶対的に悪である」という偏った価値判断に基づき、それを断罪する目的で研究を進めたのです。彼らの研究により、近現代の日本史や、日本の伝統が全て「悪」であるかのような歴史観が形成されることになりました。このような歴史観は当然教科書や一般書籍等に反映されることになり、我々日本人が自己否定的な観念に囚われるきっかけになってしまいました。言うまでもなく、現代まで続く自虐史観の源流です。

もちろん、「進歩主義者」の批判は、歴史に対してのみではありません。現在の日本社会も彼らの批判対象になります。何かにつけて「日本は封建主義的な社会である」という批判が行われ、多くの国民もそのような言説を無意識のうちに信じている節がありますが、このような観念も戦後の「進歩主義者」によりもたらされたものです。

三　「進歩主義的」風潮の問題点

それでは、「進歩主義」の思想それ自体には、どのような問題点や矛盾があるのでしょうか。

三・一　「進歩主義者」の不寛容性

まず、「進歩主義者」はその理念とは裏腹に、非常に権威主義的であり不寛容であることが挙げられます。

彼らは、「民主主義」や「反差別」といった価値観を信じて疑いません。彼ら「進歩主義者」の価値観の問題点を指摘しようものなら、そのような言動は「差別的」「保守的」「ファシズム的」として袋叩きにされます。困ったことに彼らは、このような反対派の言論は「ヘイトスピーチ」であり、表現の自由は認められないとまで言うのです。杉田水脈氏や小川榮太郎氏のＬＧＢＴに関する論文に対する左翼側からの一方的な言論封殺は、記憶に新しいことです。愛の「多様性」を声高らかに叫ぶ人々が自分と異なる意見の「多様性」を認めないというのは実に皮肉なことですが、実際にこのような言論弾圧は日常的に起こっているのです。実に権威主義的であり、また不寛容であると言わざるを得ません。

本来、様々な価値観や意見が議論を戦わせ、真理を発見していくプロセスを保障しているのが、表現の自由の理想であり、思想の自由市場の原理です。しかし、その根本手段である表現そのものを封殺してしまうのは、「進歩主義者」の明らかな矛盾点であると言えます。

三・二　二項対立に単純化された現実認識

また、「進歩主義的」な思想や運動は、根本的に社会や歴史を見誤っています。彼らの考え方を押し進めれば、この世の事象は全て善と悪の単純な二項対立に単純化されます。差別、因習、伝統などはいずれも克服すべき悪であり、これを克服するための思想や行動はどのようなものであれ善であり正当化される、といった発想です。このような発想に立つならば、差別される側にある黒人の運動は絶対的に正しく、差別を打倒するためならば、いかなる破壊行為や略奪も許されることになります。ＬＧＢＴ問題や人種問題についても、彼らの運動は全て正しく、これに対するあらゆる批判は「ヘイトスピーチ」の名の下に封殺されることになってしまうのです。

このような認識は、現代の社会問題のみならず、歴史までも及んでいます。近現代の日本は「封建的」でありまた「帝国主義的」であり、全否定されなければならない、といった考え方がそうです。このような自虐史観は一九九〇年代頃までは広く一般層にまで流布していましたが、自由主義史観研究会や新しい歴史教科書をつくる会をはじめとする良識派有志の弛まぬ努力により、近年では相当緩和されました。しかし、メディアや文化人を中心に、このような自虐史観は未だに一定の影響力を有しています。

言うまでもなく現実とは、善悪の二項対立で割り切れるようなものではありません。物事には必ず正の側面があり、また負の側面があるものなのです。その「正負」や「善悪」の判断も、時代や立場により容易に移り変わるものです。現実の複雑な問題の単純化は、文化人と呼ばれる人種の癖と呼んでも良いものですが、現実問題の解決にはほとんど寄与しません。

このような二項対立は、もちろん近代主義やマルクス主義の産物です。二項対立の図式は一見非常にわかりやすいため、未だに様々な議論で用いられています。なお、いわゆるポストモダン思想は、このような近代主義やマルクス主義的な二項対立への反省として生まれたものですが、現在ではむしろポストモダン思想家（特にポストモダン左派）こそが「多数派／少数派」「強者／弱者」のような二項対立の図式に固執しているように見えるのは皮肉なことです。現代の左翼は、単純な「進歩主義者」や「共産主義者」よりも、むしろポストモダン思想の影響を受けたものが主流であるように思われます。そのため、ポストモダン左派の思想の問題点については、稿を改めて詳しく論じなければなりません。

三・三　個別の問題と社会全体の問題のすり替え

このような単純化された現実認識に関連して、一般的にあまり指摘されない問題点として、個別の問題を社会全体の問題にすり替えがちである、ということがあります。例えば、最近の黒人の事件について言えば、白人警官が黒人男性を殺害したことは明らかな犯罪であり、常識的に見て異常な行為であると言えます。しかし、それは、あくまでも白人警官

が黒人男性を殺害し、また、この白人警官が殺人をも躊躇なく行うことが出来るような異常な人物であったということであり、それ以上でもそれ以下でもありません。要は、この件は異常な白人警官が起こした個別的な事件に過ぎないということです。しかし、「進歩主義者」たちは、このような個別の事件を、「差別」という社会的な問題にすり替えます。白人警官の行動には「差別的」な「権力構造」が隠れており、それが殺人事件につながった、というお決まりの論法です。しかし、これではあまりにも論理の飛躍が過ぎるというものでしょう。仮にこの世に黒人差別がなかったとしても、そのこととは関係なくこの白人警官はやはり異常人格者のままでしょう。この黒人男性が殺されない代わりに、別の白人やアジア人が犠牲になるだけのことです。

このような個別と全体のすり替えは、「進歩派」による日本の近現代史への批判においてもよく見受けられます。連合国により、多くの日本人が「戦争犯罪」や「人道に対する犯罪」により、BC級戦犯として裁かれました。その中には、相当数の冤罪が混ざっていたことはよく知られたとおりです。捕虜への待遇や現地の人々との関わりについて、日本人の側にも問題があったことは確かに事実です。その中には、非人道的な振る舞いに及んでしまった者も残念ながらいました。しかしそれは、戦争中に起こった数多くの出来事の中の一部に過ぎず、決して全体ではありません。全体として見れば、残虐な者も人道的な者もおり、人道的な者の中に冤罪で裁かれてしまった人がかなりいる、ということになります。我々は、そのそれぞれの事例について個別に検討しなければならないはずです。しかし、一部の個別の例をあたかも日本軍全体の問題にすり替え、更には罪を捏造してまで当時の日本人全体を断罪しようとした連合国や「進歩主義者」の心理は、短絡的でありまた異常であると言えます。

四　欧米の「進歩主義」の歴史的背景

そもそも、欧米ではなぜ「進歩的」な思想や運動が生まれることになったのでしょうか。その原因には、欧米の歴史的事情があります。すなわち、「進歩主義」以前の欧米は、非常に不寛容な社会であったのです。例えば、古いキリスト教的価値観のもとでは、同性愛は厳しく糾弾されました。ヤハウェは、婚姻は男女で行われるべきであると規定しました。そのため、キリスト教原理主義者は同性愛を厳しく非難してきたのです。欧米のゲイリブ運動やLGBT運動の背景には、このような伝統的なキリスト教的価値観への反発があるのです。

また、特にアメリカで黒人が強い差別に遭っていたことは周知のとおりです。彼らはそもそも奴隷としてアフリカから強制連行され、長きに亘って人間と認められませんでした。二十世紀前半には、黒人のみならず、日本人を含む我々アジア人も差別対象となりました。いわゆる排日移民法が典型例です。近年の「Black Lives Matter」運動には問題も多いものの、歴史的背景を踏まえれば、このような過激な反差別運動が盛り上がるのもある程度は仕方のないことでしょう。

このように、欧米で「進歩主義的」な動きが勃興したことには、欧米特有の歴史的事情があるからなのです。すなわち、少数派や弱者を徹底的に迫害してきたという歴史です。しかし、少なくとも日本では、欧米のような性的少数者に対する弾圧はありませんでした。性的指向はあくまでも個人の問題に過ぎず、何らかの宗教や倫理観に基づいてこれを断罪するというような文化はなかったのです。この点で、日本は欧米と比べ、非常に寛容性の高い社会であったと言えます。要は、欧米と日本では歴史的背景が全く異なるのです。そのため、欧米の「進歩主義」をそのまま日本に適用しようというのは土台無理な話です。

特に「戦後民主主義的」な「進歩主義」において、欧米の価値観を過度に美化し、日本を貶めるといった論法が流行しました。しかし彼らは、欧米でこのような迫害が行われていたということを完全に過小評価していると言わざるを得ません。

それぞれの国にはそれぞれの歴史があり、またそれぞれの問題があります。日本でも、確かに差別問題は存在していましたし、今でもあるものについてはやはり存在しているでしょう。しかし、その解決には、日

本独自のやり方があるはずであり、必ずしも欧米の運動手法にそのまま便乗する必要はありません。我が国には、父祖代々受け継いだ「和」の思想があります。我々は、もっとその歴史を誇り、欧米的「進歩主義」から自立するべきではないでしょうか？

五　日本人は「進歩主義」の呪縛から脱却できるか？

ここまで、戦後日本を呪い続けてきた「進歩主義」の害毒について論じてきました。我々の歴史や社会は、彼ら「進歩主義者」が言うような劣ったものでは決してありませんでした。どこの国であれ、多かれ少なかれ社会問題はあるものです。それを、舶来の価値観に基づいて断罪するのではなく、自らの歴史や伝統を踏まえつつ、自らの手で改善していこうとする心構えが大切なのです。

残念ながら先の大戦での敗北の遺恨は大きく、日本人の中に、未だに欧米に対して引け目を感じているような雰囲気があります。引け目程度ならばまだしも、積極的に欧米の思想や運動に迎合し、我が国の歴史や社会を断罪しようとする者も少なくありません。我々はまず、我々自身の歴史や伝統に対して誇りを持たなければなりません。誇りを持つとは、独りよがりな「自尊史観」に陥るということでは決してありません。そうではなく、誇りを持った上で、我が国の性質を正確に把握し、海外の偏った色眼鏡によらず、自分たちの手でこの国の未来を作り上げていくという心がけが大切なのです。

令和日本の興亡は、敗戦以来ずっとこの国を縛り付けてきた「進歩主義」や「欧米中心主義」の呪いから脱却し、欧米に対して真の精神的独立を勝ち取れるかどうか、まさしくこの一点にかかっていると言えます。